

達成されつづける「生き方としての民主主義」

— ジョン・デューイの「信仰」(faith)に着目して —

西郷 南海子

1. はじめに—「民主主義の危機」という問題

本論文の目的は、ジョン・デューイ(1859-1952)の提唱する民主主義が、「価値判断や真理の確たる基盤」を想定しない一方で「日々の生活の中で達成されつづけてゆく」(齋藤 2009: 4)ということの意味を、宗教的経験や美的経験の観点から明らかにすることである。デューイ後期の論文『創造的民主主義—来たるべき課題』(*Creative Democracy—The Task Before Us*, 1939)に焦点を当てることで、「生き方としての民主主義」(democracy as a way of life)と、統治制度としての「政治的民主主義」(political democracy)が、ともに経験の質に関わる「信仰」(faith)によって支えられることを浮き彫りにする。

日本では今日、秘密保護法の施行や、憲法解釈変更の閣議決定、安保関連法案の強行採決などに対して、「民主主義の危機」がかつてないほど叫ばれている。ところで、民主主義とは一体何を指すのだろうか。たとえば代議制民主主義は、その一形態である。その前提となるのは、選挙での投票という行為だ。しかしながら、近年の国政選挙では投票に行かない「有権者」が、大きな割合を占めるという事態になっている¹。たしかに、何十万、何百万という票の中で自分が投じるのはたかが一票であり、捨象可能なほどに小さい。そこでは「自分が投票したところで何も変わらない」という意見は十分に説得力を持つ。このように民主主義を政治的民主主義に限定して考えた場合、その形骸化は避けられないように思われる。しかし、このような問題は昨今に限ったことではなく、デューイもまさにこのことに立ち向かっていた。

有権者に対する実際の投票者の比率は今では約二分の一である。[...] 投票の有効性に関する懐疑論は公然と表明されており、それは知識人の理論の中にだけでなく、下層大衆のことばの中にも現われてくる。「私が投票するかしないかということで、どういう違いが現われるのか。いずれにせよ、事態はまったく同じに動いているのだ」。(Dewey 1927=2015: 148)

¹ 国政選挙の投票率は、2014年12月の第47回衆議院議員総選挙では、52.66%であり、中でも20歳代の投票率は32.58%であった。(総務省ホームページ、2015年8月26日確認
http://www.soumu.go.jp/senkyo/senkyo_s/news/sonota/nendaibetu/)

むしろデューイは、投票に行きさえすれば民主主義が機能すると考えているのではない。むしろデューイにとって投票行動の意義とは、「それがある程度まで社会の必要と苦悩とを明かす協議と討議の場を含んでいるということ」である（Dewey 1927=2015: 253）。問題なのは、そのような場がもはや機能しなくなっていることであり、その原因の究明と解決こそが必要である。デューイによれば、20世紀初頭にかけての産業の発展は、かつてない地理的な広がりをもつ社会を出現させたが、そのことにより達成された政治的統合はかえって人々を困惑させている。すなわち、人々は「自分たちが理解したりあるいは統制したりするにはあまりに巨大な力の流れにとらえられていることを感じている」（Dewey 1927=2015: 169）。このようにあらがいがたいニヒリズムに対して、デューイは民主主義を、コミュニケーションを軸とした「生き方としての民主主義」として論じなおした。

齋藤直子は、「プロセスに力点を置き価値判断や真理の確たる基準を想定しないデューイのプラグマティズム」、すなわち反基礎づけ主義的な成長の思想を、批判的に再構築する必要性を訴える（齋藤 2009: 6）。本論文では、齋藤の議論を引き継ぎつつ、デューイが看取していた民主主義の可能性についてより具体的に明らかにするために、論文『創造的民主主義—来たるべき課題』²と、そこで頻出する「信仰」（faith）という言葉に着目する。コミュニケーションを通じて人々の経験が再構成されるとき、現実と理想の統合が知覚されるとデューイはいう。このような美的かつ宗教的な経験への「信仰」が、「生き方としての民主主義」の根底をなす。

このようなデューイの哲学は、鶴見俊輔によれば「コミュニケーションについての楽天的信仰にうらうちされて」おり、「そのコミュニケーションの失敗、つたわらなさからまなぼうとする手だては、デューイの哲学の中では工夫されていない」と批判する（鶴見 1980: 267）。しかしながら鶴見は、人間が日々の選択を行う際に、固定的に積み上げた経験からではなく「新しく経験から出発して考える」というデューイの思考法は、やはり意義をもつという。

このような考え方をデューイからうけつぐ時、日本の哲学はデューイを卒業したか？という問いに対して、卒業してはいない、まだ入門してさえいないではないか、と私は答えない。（鶴見 1980: 277）

日々の選択をそのつど、選択の幅を生み出した状況からとらえなおすということは、効率性に欠けるように思われる。しかし、既成の権威に依拠することなく、絶えず自分の経験から出発して考え、試しながら進んでいくことを訴える鶴見の提起は、今日も色あせていない。本論文では、デューイの提唱する「生き方としての民主主義」が、いまだ実現されていない新たな可能性を人々に感じ取らせ、かつ「政治的民主主義」を生活の中に根づかせるものであることを明らかにする。本論文では、デューイを通じて「生き方としての民主主義」を論じることが政治性と不可分であることを、経験の質に関する「信仰」を鍵として論証していく。

² 『創造的民主主義—来たるべき課題』は短い論文だが、faith（本論文では「信仰」と訳出）という言葉が21回、belief（本論文では「信念」と訳出）が12回登場することからも、これらの言葉が特別な意味合いをもつことが推測される。

2. コミュニケーションを通じた「グレート・コミュニティ」の探求

『創造的民主主義—来たるべき課題』は、デューイの生誕 80 年式典のために執筆した 15 段落からなる短い論文である。同論文では、民主主義を、統治制度としてのみならず、人々の生活の仕方という観点からとらえるというデューイの姿勢が貫かれている。大衆社会、すなわち電気や蒸気という新しいテクノロジーによって作り出された「グレート・ソサエティ」では、人々のつながりは非人格的なものとなり、人々は公的な事柄に対する責任感をもつことが難しくなった。しかし、デューイはエリート主導の民主主義を主張することはなかった。デューイが立ち戻ることを求めたのは、「民主主義の病弊に対する療法は、より多くの民主主義を実現することだ」という古くからある主張であった (Dewey 1927=2014: 180)。

リチャード・J・バーンスタインは *Creative Democracy—The Task Still Before Us* (2000) において、デューイが『創造的民主主義』を執筆した 1939 年という時期に着目し、デューイの問題意識を探る。そして、ナチス台頭に対するデューイの危機感だけでなく、もう一つのあまり知られていない事実に注意をうながす (Bernstein 2000: 191)。それは、デューイが 1937 年からモスクワ裁判におけるトロツキーの起訴内容に関する調査委員会の委員長を務めたことである³。デューイは 1928 年にソヴィエトを訪問し、そこで行われている社会改革を目の当たりにして称賛した。ところがスターリンの独裁体制の強化とともに失望をあらわにしていく。この委員会活動を通じてデューイは、社会的進歩は必要であるが、それを達成する手段もまた民主的でなければならないことを確信した。バーンスタインによれば、デューイが感じとった民主主義への最も深刻な脅威とは、ヒトラーやスターリンの独裁といった外的な要因だけでなく、「内的」(internal) なものであった。民主主義とは、その精神を絶えず涵養することなしには、形骸化してしまうのである。そしてデューイは民主主義を、日常生活に根ざした「道徳的あるいは倫理的な理想」として照らし出す。

『創造的民主主義』においてデューイは、150 年前のアメリカ建国時同様に、民主主義を創造する課題に再度立ち向かっていることを強調する。ただし、デューイは過ぎ去った時代を単に賛美しているのではない。建国時の人々の尽力によってアメリカの政治的構造が築かれたことを確認した上で、デューイは自分自身をも含めた「我々」が、民主主義が主にワシントンで行われる何かであるかのようにふるまってきたことを反省するのである。そこでデューイが提唱するのが「生き方としての民主主義」である。

民主主義とは、人間の性質一般のみならず、適切な条件が整えられた場合に、人間が知的な判断と行動をおこなう能力に対する信仰 (faith) によって統率される、個人の生き方である。(Dewey 1988: 227)

³ ジョン・デューイ調査委員会編著『トロツキーは無罪だ！モスクワ裁判検証の記録』(梓澤登訳、現代書館、2009 年)によれば、委員会の概略は以下のとおりである。1936 年と 1937 年のモスクワ裁判において、トロツキーとその息子は、ソヴィエト連邦の指導者に対する犯罪について起訴され、「聴聞の機会も与えられないまま、有罪を宣告された」。これに対して、トロツキーと息子は亡命先のメキシコから「無罪であることの証拠資料を検討する国際的な調査委員会の設置を要請した」(p. 24)。

民主主義とは生き方であり、人間の能力への「信仰」によって支えられるというこの考えに、何ら根本的に新しいものは含まれていないと、デューイは述べる。バーンスタインは、この考えが今日もラディカルな意義をもつことを示すために、民主主義の起源をさかのぼる。かつては民主主義の担い手としては排除されてきた人々（奴隷、女性、無産者など）が存在した。つまり「すべての人々」（all the people）による統治は行われることはなかった。しかし、「すべての人々」による統治を成し得なかったことを、単なる偽善の結果と見ることは時代錯誤的だとバーンスタインはいう。むしろ、すべての人々が市民としての責務を果たしえなかったのは、教育などの社会的諸条件の不十分さによるのであり、だからこそ今日でも、諸条件の整備によりそれぞれの個人は民主的なコミュニティの担い手になりうるというデューイの主張を認めることは、ラディカルな意義をもつ（Bernstein 2000: 193）。

とはいえ、「生き方としての民主主義」は、大衆社会に蔓延するニヒリズムに対抗しうるのだろうか。ここで着目したいのは、ウォルター・リップマンとの応答関係から鮮明になるデューイの大衆社会のとらえ方である。電気や蒸気という新しいテクノロジーによって作り出された「グレート・ソサエティ」では、人々のつながりは非人格的なものとなり、公的な事柄に対する責任感をもつことが難しくなった。つまり、民主主義を担う人々の能力が疑問視されるようになった。その問題を指摘した代表的な論者が、『世論』（1922）を著したウォルター・リップマンである。リップマンは、もはや大衆には適切な判断能力がないと考え、それに代わってエリートが意思決定を統率すべきだと主張した。このことについてデューイはリップマンと現状認識を共有している。

達成された統合にもかかわらず、あるいはむしろその性質のゆえに、公衆は失われているように思われる。あるいは少なくとも公衆が困惑していることは確かである（ウォルター・リップマンの『幻の公衆』を見よ。彼の『世論』とともにこの著作に対して、私は多くを負っていることを感謝したい。それはここでの特殊な論点に関してだけではなく、私の論文全体に含まれる思想についてもいえることであり、彼とは異なった結論に到達している場合でさえ同様である）。（Dewey 1927=2014: 146-147）

ただしデューイはリップマンとは異なる方策を提言した。つまりデューイは、民主主義の病弊への治療は、より一層の民主主義であると応答したのである（Bernstein 2000: 195）。

デューイの構想は、機械的な人間関係に支配された「グレート・ソサエティ」を、コミュニケーションを軸とした「グレート・コミュニティ」へ転換することである。そしてその構想の根拠は、「グレート・ソサエティ」そのものにある。「グレート・ソサエティ」を出現させたテクノロジーこそが、「自由な社会的探究」と「豊かで感動的なコミュニケーションの芸術」とを結びつける「物理的な機構」となりうるからである（Dewey 1927=2014: 227）。このコミュニティへの転換という構想に関して、検討すべき課題は、果たして「デューイの楽観論がここで降参してしまったのか」である（ボイスヴァート 1997=2015: 114）。もし、「民主主義が、常に成長していく過程としてではなく、固定的で最終的な、社会的な帰着点として考えられてしまうならば」、デューイの構想は挫折した楽観論のように思われる。しかし、この構想の意義は「理

想として大コミュニティを計画することにより、努力や責任を具体的な方向に向けることが行われる」点にあると、ボイスヴァートは見る (ibid.)。この見方を、さらに一步進めるならば、この「グレート・コミュニティ」構想を、固定的な目標としてではなく、人々の生活の中に実際に立ち現れてくるものとして理解することが必要である。なぜなら、デューイ民主主義論の軸は、人々の経験を、目的に対する手段という従属関係におかず、手段の中で目的が実現されていくプロセスとしてとらえるからである。この考えは『創造的民主主義』の以下の一文に端的にあらわれている。

民主主義とは、経験のプロセスは得られたどのような特別な結果よりも重要であるという信仰であり、そこでは、達成された特別な結果は、現在進行中のプロセスを豊かにし秩序づけるために用いられる限りにおいて究極的な価値を有する。(Dewey 1988: 229, 傍点引用者)

この民主主義論の要は、経験のプロセスそのものであるが、これはデューイが教育論において強調していた「経験の連続性の原理」(Dewey 1938=2004: 35) と符合する。デューイが両者において一貫して批判するのは、経験が手段と目的、過程と結果というように分断され、まとまりを失っている状態である。それに対して「ほんらい生き物は、経験の中身そのものに満足することを求める」(Dewey 1934=2010: 427)。このように現在の経験の質をよりよいものにする、すなわち経験の意味を豊かにすることこそが、経験を広げ、連続させるのである。

このような経験のあり方を、デューイは「創造的民主主義」と呼ぶ。バーンスタインは、民主主義が「創造的」であるということの核心について、二点挙げる。一点目には、民主主義は創造的な個人を前提とし、また育てようとしているということである。『『創造性』とは特別な状況に限定されるものではなく、また特別な美的領域に限定されるものでもない。それは、すべての人間経験と我々の日常実践の中で、明らかにしうる—実際に明らかにされるし、されなければならない—ものののである」(Bernstein 2000: 201)。もう一点は、民主主義が創造的でなければならないことの、よりラディカルな意味である。民主主義は、刻々と変化する状況に対応するために、それ自体を再創造しつづけるという課題から切り離せない。つまりデューイのいう“The Task Before Us”とは、バーンスタインによれば“The Task Still Before Us”なのであり、人々はつねに課題と向き合いつづけることになる。このことは、まさに民主主義の概念そのものに内在しているのである (Bernstein 2000: 202)。

しかしながら、バーンスタインのこの記述は、民主主義とその課題がいつまでも継続するものであることに力点があり、民主主義の「創造性」が十分には描き出せていないように思われる。たしかに、デューイの民主主義論が単なる楽観論ではないことを示すために、現実との格闘という側面を強調することは妥当ではあるが、現にバーンスタインが言及しているように、民主主義が触れて感じられるもの (tangible) であるということについて、デューイの経験概念の内側から掘り下げて論じることが必要である。そこで本論文では次節から、『創造的民主主義』におけるキーワード「信仰」に着目し、『人類共通の信仰』(A Common Faith, 1934) を用いながら、人々のコミュニケーションの中に民主主義のヴィジョンが到来する瞬間を描き出す。

3. 経験の質を豊かにすることへの「信仰」

『創造的民主主義』において、デューイは民主主義を、外在的な政治制度ではなく、経験のプロセスそのものに関する「信仰」とであると論じた。デューイ自身の定義によれば、経験とは「個々人と周囲の状況、とりわけ人間的な環境との自由な相互作用」である (Dewey 1988: 229)。この相互作用において決定的な役割を果たすのが、それぞれの個人がもつ差異である。

差異の表現は他者の権利であるだけでなく、自分自身の生活経験を豊かにする手段であるという信仰から、諸差異にそれ自身を明らかにする機会を与えることによって協働することとは、民主的な、個人の生き方に内在的なものである。(Dewey 1988: 228, 傍点引用者)

それぞれの個人がそれぞれの違いを、協働を通じて表現していくことにより、相互の経験を共有し、互いの経験の意味を増やしていくことができる。たとえそれぞれの個人にとって欲求や目的が異なっていたとしても、互いの経験を再構成し合うプロセスそのものには、値踏みのできない価値がある。経験のこのようなあり方への「信仰」こそが、デューイの提唱する「生き方としての民主主義」を支えている。そしてこの「信仰」は、ユートピア的な思いつきではなく、デューイが実際の生活経験から獲得してきたものであるという (Dewey 1988: 227)。

民主主義を経験の共有としてとらえ、そのことへの「信仰」について論じたのが、マイケル・エルドリッジの *Dewey's Faith in Democracy as Shared Experience* (1996) である。エルドリッジは、デューイの提唱する民主主義、すなわち「生き方としての民主主義」が、現実においてどのように機能しうるのかという問題に焦点を当てた。つまり「生き方としての民主主義」は、あくまでも個人の生き方であり小さなコミュニティでの実践に限定されることはやむをえないのか、それとも「政治的民主主義」にも影響を与えうるのかという問いである。

本論文で前述したとおり、「生き方としての民主主義」は経験の質への「信仰」によって支えられている。この「信仰」とは、『人類共通の信仰』によれば、我々と環境との相互作用の質として見出される「宗教的なもの」(the religious) である。この、経験における「宗教的なもの」は、制度的な「宗教」(the religion) とは区別され、デューイは前者がコミュニティの生命となることを論じる。デューイは、超自然的なものの存在を否定する立場から、「宗教的なもの」をこのようにとらえるわけであるが、エルドリッジは、このようなデューイの民主主義への「信仰」こそが、デューイが批判する超自然的なものへの傾倒だと批判されてきたことを紹介する (Eldridge 1996:12)。

この批判への反論としてエルドリッジは、二つの点から応答する。一つ目は、デューイのいう「信仰」とは、実験的な性質をもつものであるという点である。それは何かに対する盲信ではなく、あくまでも行動への傾向のようなものであると説明する。つまり、それはまだ存在はしていないが、現在の状況から生じうる「一般化されたもくろみ」(generalized end-in-view) なのである (Eldridge 1996:20)。そしてこの行動への傾向は、経験の中で常に改訂 (revise) され続ける。二点目にエルドリッジは、デューイの提唱する民主主義の理想が実践可能であるこ

との例証として、デューイが1930年代に展開した活動（教職員組合の労働運動など）について紙幅を割いて紹介する。そして、デューイの提唱する民主主義とは、人々の生活に根ざす広い概念での民主主義の中に、「政治的民主主義」も位置づけるものであることを明らかにする。

こうしてエルドリッジの論考は、共有された経験としての民主主義への「信仰」が、デューイの批判するような意味での「宗教」ではなく、実践を通じて経験の中で改訂されていくものであることを示した。しかしながら、ここから新たな疑問が生じてくる。デューイはこのように民主主義を追求する姿勢を、なぜ「信仰」という言葉によって表現しようとしたのか。デューイの民主主義論を擁護するために、それが合理性を欠いた「宗教」ではないということを論証することはたしかに必要である。ただしそれを行った場合、その民主主義論が「信仰」であることの必然性が見失われてしまう。

ここでデューイ自身の「信仰」についての概念に立ち戻る必要がある。同書においてデューイは、既成の制度としての「宗教」と、「宗教的と呼ばれうる、経験に内在する理想的な要素」(Dewey 1934=2011: 12) を明確に区別し、後者が現代社会において果たす意義について論じる。ここでいう宗教性とは、宗教集団などの実体名詞 (a noun substantive) に示されるのではなく、「形容詞によって示される経験の性質」である⁴ (ibid.: 4)。その宗教的経験において不可欠なはたらきをするのが、イマジネーションである。

イマジネーションは、経験がもつ「理想」の要素と密接に結びついている。このことは、広く一般に認められている。ところが、イマジネーションが「信仰」と結びついていることは、それほど広く一般には認められていない。「信仰」(faith)は、知ることに代わるもの、見ることに代わるものとみなされてきた。信仰はキリスト教⁵では、目に見えない事柄の〈確認〉(evidence)である、と定義される。[……] われわれは有限であり、正確ではない。そのために、現在ではわれわれの目に見えない事柄がある。信仰とは、こうした目に見えない事柄を、いわば、予想して描いた〈ヴィジョン〉である。(Dewey 1934=2011: 33, 引用者一部改訳)

つまり「信仰」とは、イマジネーションのはたらきによって、目には見えない可能性が、心的なヴィジョンとして到来することを指す。デューイによれば、「イマジネーション」という用語の明確な意味は、「現実にはまだ実現されていない事柄が、われわれの心にとどき、われわれを行動に駆りたてる力をもつということ」である (Dewey 1934=2011: 66)。このことをトーマス・M・アレクサンダーは以下のように説明する。「デューイにとって、イマジネーションとは可能性をつかみとる力、つまり可能性に照らし出された現実のものを見ることである。それは何か『空想的』(imaginary)あるいは『幻想的』(illusory)なものとしてとらえられるべきではない」(Alexander 2013: xxviii, 傍点引用者)。イマジネーションとは架空のものではなく、むしろ環

⁴ デューイは『人類共通の信仰』と同年に出版した『経験としての芸術』においても、同様の考えを展開している。美を実体としてとらえるのではなく、“the esthetic”という形容詞によって表現される経験の質としてとらえている。

⁵ 『人類共通の信仰』を邦訳した栗田修の補足によれば、デューイの「経験論的自然主義」の立場では、「神」とは「われわれのこの現実社会から、人間のイマジネーションの働きによって現れ続ける『理想』である」(栗田修訳『人類共通の信仰』2011年、晃洋書房、p. 65)。

境との相互作用の中で生きている生き物にとって欠かせない生態的 (ecological) なはたらきである。そしてイマジネーションによる諸理念の統合は、人々を内側から導くという実際の力をもつのである (ibid.)。

このようにイマジネーションによってヴィジョンが拓けてくるプロセスを、経験の内側から描き出したのが、『人類共通の信仰』と同年に出版された『経験としての芸術』である。次章では、芸術作品を媒介として経験が再構成されるプロセスに、イマジネーションがどのようにはたらくのかを明らかにする。

4. ヴィジョンを拓くイマジネーションのはたらき

『経験としての芸術』の大きな特徴は、美的経験を、能動的経験と受動的経験が相互浸透に至った「ひとつの経験」(an experience) ととらえる点にある。デューイは「美」(the beauty) を芸術作品に内在するものとしてはとらず、あくまでも美的な経験の質 (the aesthetic) として考える⁶。デューイは、生物が「生きる糧」を得るために前に進もうとする衝動性 (impulsion)⁷を、「完全な経験の発端」と位置づける (Dewey 1934=2010: 65)。生き物の衝動性は、外に向かって発現する中で障壁にぶつかり、反省がもたらされる。つまり、過去の経験の意味が現在の状況で組織しなおされる。こうして外へ向かうエネルギーと、抵抗のエネルギーがリズムカルに相互に浸透し、調和に至る瞬間に、経験は美的な性質を帯びる。それに対して、今日の多くの人々の経験は、目的と手段の二元論に閉じ込められており、美的な性質を失っていることをデューイは危惧する。このように経験のプロセスそのものを享受することが困難な状態は、デューイの民主主義論の根幹に関わる問題である。

国家と国家・投資家と労働者・生産者と消費者との関係は相互作用ではあるが、そこにはほとんどコミュニケーションがない。これらのもののあいだには相互作用はあるが、それはきわめて外的であり部分的である。したがって、われわれはそうした相互作用の結果を甘受はするが、それを一つの経験に統合することはない。[...] 哲学的に言えば、われわれが直面する問題は断絶と連続とをどう関連させるべきか、という問題である。(Dewey 1934=2010: 418-419)

⁶ 桑原武夫 (1952) は、このようなデューイの美的経験論では、作品の価値は個々の鑑賞者に委ねられることになり、芸術作品の価値の所在があいまいになることを批判する (桑原 1952: 100-111)。その指摘に『経験としての芸術』の第13章「批評と知覚」に沿って応答するならば、以下ようになる (Dewey 1934=2010: 372-406)。デューイは、既成の権威に基づいて行われる批評を「裁判官的批評」や、その反動として呼び起こされた「印象主義的批評」も批判する。デューイによれば批評とは、判定 (judgement) であり、その素材は作品である。「しかし、この事物は、批評家じしんの感受性・知識・過去の経験から蓄えられてきた諸意味との相互作用をへて、批評家の経験にはいりこむ事物である」。つまり批評家の役割は、人々と作品との相互作用を促進させることを目的とするのであって、妨害することではないという。桑原は、こうした批評もさらに何らかの価値基準からは免れないことを指摘するが、デューイ美的経験論に立ち戻るならば、その基準も経験の外部にある固定的なものではなく、経験をくぐりぬける者の側から差し出され、それを受け取った人々から問い直されることで作りなおされるような基準ということになる。

⁷ デューイは、ここでは衝動 (impulse) と衝動性 (impulsion) を区別している。「衝動」は、「特殊化され、個々別々に分化している」反応動作であり、「衝動性」は「一全体としての生き物の外にむかう、また前に向かう動きを示す」(Dewey 1934=2010: 65)。個々の衝動は、衝動性を補佐するメカニズムであるという。

コミュニケーションを通じて、経験が連続性を回復するときに欠かせないのがイマジネーションのはたらきである。同書第12章「哲学に対する挑戦」においてイマジネーションは、以下のように定義される。イマジネーションは、過去の経験から引きだされた意味を、現在の状況において再組織する。それは「諸事物が統一体 (an integral whole) になっていると見たり感じたりする〈仕方〉(way)」である (Dewey 1934=2010: 334)。

このイマジネーションとは、「芸術の制作と鑑賞のすべての過程を活気づけ、それに浸透している一つの質 (a quality)」である (ibid., 引用者一部改訳)。たとえば画家は、キャンバスに絵の具を一筆ずつ置くたびに、それがどのように知覚されるかを想像しながら制作を進める。つまり、制作とは鑑賞と同時進行の活動であり、能動的経験と受動的経験がひとまとまりになっている。また鑑賞という行為も、両者が分かちがたく結びついた創造的な行為である。というのも鑑賞者は、制作者の経験へとイマジネーションをはたらかせることで、自身の経験を再構成するからである。つまり芸術とは「その形式にかんして言うなら、なすことと受け取ること (doing and undergoing) とを、出ていくエネルギーと入ってくるエネルギー (outgoing and incoming energy) とを、一つに結合すること」である (Dewey 1934=2010: 54)。このように芸術を、「美」が宿る実体としてではなく、経験としてとらえなおすことが、デューイの芸術論の核心である。

芸術は、哲学の想像的冒険に対して、芸術ならではの監督権をもつ。というのも、哲学は芸術と同じように想像的精神を介して働くが、芸術は経験を〈経験そのものとして〉最も直接的かつ完全に表示するからである。／経験としての芸術においては、現実と可能性ないし理想、新と旧、客体的要素と個人的反応、個と普遍、表面と深層、感覚と意味など相反するものが、一つの経験に統合される。(Dewey 1934=2010: 370-371, 引用者一部改訳)

つまりイマジネーションのはたらきは、現実と可能性などの相反する要素を相互浸透に至らせる。それは、ほんらい生き物が求める経験の中身そのものへの満足であるのと同時に、「知覚の力を完全にすること」なのである (Dewey 1934=2010: 406)。そして経験の統合とは、そのつどの経験の完遂でありつつも、静止状態に至ることではない。なぜなら、イマジネーションのはたらきによって再構成された衝動性や思考は、環境の移り変わりとともに、すでに次の経験へと動き出しているからである。イマジネーションによるヴィジョンは「現実という織物に織り込まれている可能性を引き出せる力」であり、経験を拡大し、連続させる役割を果たすのである。『経験としての芸術』は、以下の文でしめくくられている。

芸術作品において可能性と現実との統一を知覚することは、それじしん大きな善である。しかし、その善はそれがもたれるその瞬間に終わるのではない。知覚に表れたこの統一は、衝動性と思考を改造するものとなって存続する。欲望と目的の広範かつ大規模な方向転換の最初の兆しは、かならずイマジネーションによって生じる。[...] そして芸術は、規則や教訓・訓戒や監督には見いだせない新しい人間関係の可能性を、こっそり伝えてくれる。(Dewey 1934=2010: 435)

このように美的経験は、人々に満足感を与えるだけでなく、さらなる美的経験への衝動性と思考を生み出し続ける。この美的経験のあり方を踏まえると、民主主義が創造的なものであるということの意味がより鮮明になる。これまで見てきたようにデューイの民主主義論の軸となるのは、人々の経験が相互作用によって絶えず再構成されていくプロセスである。バーンスタイン（2000）は民主主義が課題と常に向き合いつづける状態にあることを論じたが、それは現実と理想が対置されたときに現実の不十分さが露呈されるというよりも、現在の相互作用においてイマジネーションがはたらくとき、そこに未来のヴィジョンが絶えず立ち現れてくるという意味での“The Task Before Us”である。つまり、「民主主義は達成され続ける実践と理想であり、現在進行形の行為と生活であると同時に未完のプロジェクトでもある」のだ（齋藤 2009: 11）。

民主的な胎芽的社会としての学校について論じた『学校と社会』（1899）では、子どもたちの衝動を相互作用の中で実現していくことにより、子どもたちのイマジネーションが活性化する様子が描かれていた。子どもたちは、料理や裁縫、木工といった具体的な協働を通じて、経験の意味を増やし、相互作用への衝動を再構成していく。つまり、実際の素材と格闘し、周囲の人々と話し合う中で、自らの衝動を統御し実現させる方法を身につけていくのである。成長の目的は成長それ自身であるというデューイの主張は、単なる同語反復ではなく、人々が日常生活をともにする中で互いの経験の意味を拡大しあうことに値踏みのできない価値があるという「信仰」であった。その可能性は、経験共有のプロセスすなわちコミュニケーションの芸術において、もっとも如実に示されている。

以上をまとめるならば、コミュニケーションによる経験の共有、再構成こそが、コミュニティを創出するといえる。コミュニケーションの中で、人々は新しい人間関係の可能性を感じることができる。このヴィジョンは、実際に人々を次の行動へと駆りたてる力を持つ。「民主主義が極致に達する」のは「自由な社会的探究が豊かで感動的なコミュニケーションの芸術と固く結びつけられる時」なのである（Dewey 1927=2015: 227）。

5. まとめ—達成し続ける「生き方としての民主主義」

デューイ民主主義論の特色は、生活での協働を通じて人々の「共有された関心の範囲が拡大することや、いっそう多様な個人的能力が解放されること」にある（Dewey 1916=1975: 142）。このようにデューイが展望し実践しようとした「グレート・コミュニティ」とは、人々が個性を触発しあう共同体であり、その美的な経験は、さらなる相互作用を求める衝動を再創造する。

デューイの民主主義論に対しては、デューイの生前から楽観主義との批判が繰り返されてきた。そのような批判の多くは、デューイが提示する民主主義のあり方を、固定的な理想ととらえ、それを現実と対峙させるという二元論において理解していることにあって考えられる。しかしデューイの提唱する民主主義とは、正しさが証明された理想から設計されるようなものではなく、あくまでも人々の経験共有のプロセスの中に立ち現れてくるものである。この経験の共有とは、単なる情報の伝達を超えて、人々のこれまでの経験が現在の状況において再組織されることである。経験そのものの質を求める衝動に突き動かされるこのプロセスには、その

衝動の実現を妨げる障壁との摩擦がつきまとう。しかし、この摩擦こそが思考に反省をもたらし、衝動の実現への原動力となる。こうして生き物の外に向かうエネルギーと内に向かうエネルギーが、相互浸透に至った瞬間が美的経験である。この美的経験は、それまでは相反していた現実と可能性をひとまとまりのものとして知覚させ、人々の衝動性と思考を再構成する。イマジネーションとは、このプロセスに浸透しまとまりを生み出している、ひとつの質である (Dewey 1934=2010: 334)。

このように経験が美的な性質を帯びるのは、芸術作品を媒介として経験を再構成する美術館の中だけではない。たとえばデューイによれば、食事をするという日常の行為も、食事がどのように用意されたのかということにイマジネーションがはたらくとき、より美的なものになるという。人々が互いの行動の結びつきを認識し、経験の意味を広げあうことが、大衆社会における機械的な人間関係を終わらせる。これは、生き物が経験そのものに満足を求めるという、根源的な欲求の実現でもある。そしてこのような相互作用における経験の再構成こそが、「最も張りつめた生命の瞬間」である (Dewey 1934=2010: 17)。

デューイは、社会が民主的であるかどうかを、人々の経験がどのように相互作用しているかという観点から考える。『民主主義と教育』では、民主的な社会の基準が二つ提示される。第一に、共有された共同の関心が多様化していくことと、そのことによって社会が統制されることに信頼 (reliance) をおくこと。第二に、社会集団が自由に相互作用することと、そのことによって社会的習慣に変化が起こることである (Dewey 1916=1975: 141)。つまりデューイのいう民主主義では、選挙に象徴されるような「政治的民主主義」も、人々の経験の相互作用の中に位置づけられて初めて意味をもつ。本論文冒頭で取り上げた「自分が投票しても何も変わらない」というニヒリズムは、民主主義を自分から切り離されたメカニズムとしてとらえるときに、必然的に生まれる考えである。たしかに、巨大な地理的広がりや政治機構を民主主義の議論の前提とする場合、一人一人の行動はほとんど影響力をもちえないものとして捨象されてしまう。民主主義がこのように形骸化することは、デューイにとって、ファシズム同様に危惧すべきものだった。どちらも、人々の経験がより広く共有されることを妨げてしまうからである。

したがって、デューイの民主主義論の意義は、従来外在的なメカニズムとして論じられてきた民主主義を、一人ひとりの「生き方」として打ち出した点にある。そしてその「生き方」は、コミュニケーションを通じて一人ひとりの個性や能力が引き出され合うことへの「信仰」に支えられている。どれほど機械的な人間関係に支配された社会であれ、美的経験の契機は生活の中にちりばめられている。人々はコミュニケーションを通じて、現実の中から未だ達成されていない可能性を看取することにより、新たな方向への行動が駆り立てられる。この経験におけるはたらきこそが「信仰」であり、民主主義を「生き方」として絶えず達成しつづけ、さらには政治的民主主義に息吹を送り込むのである。

【文献一覧：デューイの著作】

本論文における原著からの引用は、『デューイ著作集』(Boydston, Joh Ann (ed), *Collected Works of John Dewey*. Carbondale: Southern Illinois University Press) に基づく。初期著作集 (1882-1898 年) は“EW”、中期著作集 (1908-1924 年) は“MW”、後期著作集 (1925-1953 年) は“LW”と省

略する（なお括弧内の年号は、『デューイ著作集』の出版年である）。

Dewey, John. 1899. *The School and Society* (1969), MW1.

＝1957, 『学校と社会』 宮原誠一訳, 岩波書店.

――. 1916. *Democracy and Education* (1980), MW9.

＝1975, 『民主主義と教育（上）（下）』 松野安男訳, 岩波書店.

――. 1927. *The Public and its Problems* (1984), LW2.

＝2014, 『公衆とその諸問題』 阿部齊訳, 筑摩書房.

――. 1934. *Art as Experience* (1987), LW10.

＝2010, 『経験としての芸術』 栗田修訳, 晃洋書房.

――. 1934. *A Common Faith* (1986), LW9.

＝2011, 『人類共通の信仰』 栗田修訳, 晃洋書房.

――. 1938. *Experience and Education* (1988), LW13.

＝2004, 『経験と教育』 市村尚久訳, 講談社学術文庫.

――. 1939. *Creative Democracy—The Task Before Us* (1988), LW14.

【文献一覧：デューイに関する他の著作】

Alexander, Thomas. M. 2013. “Introduction.” *The Common Faith*, Second Edition, New Haven: Yale University Press.

Bernstein, Richard. J. 2000. “Creative Democracy—The Task Still Before Us.” *American Journal of Theology and Philosophy*, 21 (3) : 215-228.

レイモンド・D・ボイスヴァート (2015) 『ジョン・デューイ—現代を問い直す—』 藤井千春訳, 晃洋書房.

Eldridge, Michael. 1996. “Dewey’s Faith in Democracy as Shared Experience” *Transactions of the Charles S. Peirce Society*. Winter, 1996, Vol. XXXII, No.1: 11-30.

早川操 (2014) 「デューイの美的経験論における実験主義的特徴—『ひとつの経験』と『質的思考』の意義再考—」『日本デューイ学会紀要 第55号』.

ジョン・デューイ調査委員会編著 (2009) 『トロツキーは無罪だ！モスクワ裁判検証の記録』 梓澤登訳, 現代書館.

桑原武夫 [ほか] 著, 鶴見和子編 (1952) 『デューイ研究 アメリカの考え方の批判』 春秋社.

ルイ・メナンド (2011) 『メタフィジカル・クラブ 米国100年の精神史』 野口良平・那須耕介・石井素子訳, みすず書房.

齋藤直子 (2009) 『〈内なる光〉と教育 プラグマティズムの再構築』 法政大学出版局.

鶴見俊輔 (1984) 『デューイ』 講談社.

鶴見俊輔 (2007) 『たまたま、この世界に生まれて 半世紀後の『アメリカ哲学』講義』 編集グループ SURE.

上野正道 (2010) 『学校の公共性と民主主義 デューイの美的経験論へ』 東京大学出版会.

(日本学術振興会特別研究員 臨床教育学専攻 博士後期課程1年)

(受稿 2015年9月1日、改稿 2015年11月4日、受理 2015年12月24日)

達成されつづける「生き方としての民主主義」

—ジョン・デューイの「信仰」(faith)に着目して—

西郷 南海子

本論文は、ジョン・デューイの提唱する「生き方としての民主主義」(democracy as a way of life)を、宗教的経験・美的経験論と照らし合わせることで、それが絶えず達成されつづけるということの意義を明らかにする。デューイは後期の論文『創造的民主主義—来たるべき課題』(*Creative Democracy—The Task Before Us*, 1939)において、民主主義を、政治制度であるだけでなく、人々がコミュニティでの協働を通じて経験を豊かにすることへの「信仰」として論じなおした。人々は、コミュニケーションを通じて、イマジネーションをはたらかせる中で経験を再構成する。このとき、それまでは相反していた現実と理想がひとまとまりのものとして知覚される。こうして未だ実現されていない可能性のヴィジョンが到来することが、デューイのいう「宗教的」な経験である。経験のこのようなあり方への「信仰」が、民主主義を生き方として絶えず達成しつづけ、さらには政治的民主主義に息吹を送り込むのである。

Achieving “Democracy as a Way of Life”: An Examination Focused on Dewey’s Concept of “Faith”

SAIGO Minako

This paper discusses the significance of John Dewey’s concept of “democracy as a way of life”, in light of the religious experience and esthetic experience. In his later essay, *Creative Democracy—The Task Before Us* (1939), Dewey advocated democracy not only as a political system of government, but also as a social concept: “democracy as a way of life is controlled by personal faith in personal day-by-day working together with others.” People can reorganize and enrich their experience through the art of communication. This process is animated and pervaded by the imagination. In *Art as Experience* (1934), Dewey describes this esthetic process as follows: “imaginative vision elicits the possibilities that are interwoven within the texture of the actual.” Possibilities reach people through the imagination and guide them toward the next experience. This is what Dewey calls “religious experience,” in which he finds faith in the human capacity for intelligent judgment and action. “Democracy as a way of life” is achieved by this experience and it reanimates political democracy.

キーワード: 生き方としての民主主義、政治的民主主義、美的経験、信仰、イマジネーション

Keywords: Democracy as a way of life, political democracy, esthetic experience, faith, imagination